

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04373

研究課題名(和文) 学校危機予防教育のサイクル型支援フレームワーク構築とデフォルトインストールの実現

研究課題名(英文) Systemic Framework-building and Activating Default Installment in School Crisis Prevention Education

研究代表者

渡邊 弥生 (WATANABE, Yayoi)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：00210956

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：学校危機には、いじめ、不登校、非行だけではなく自然災害、事故など多くの種類があるがこうした危機が同時に起きるマルチハザードな状況までを見据えて、準備、介入、回復の過程よりもむしろ、想定される状況を見据えながらも、まず予防の重要性を唱えた。さらに予防策として、感情や社会性の育成に力を入れる授業案、危機予防のアセスメントの展開と考察、実態を元にした危機予防のためのシミュレーション対策となるキット開発とワークショップの展開案などを提案した。学会シンポジウム、論文、図書においても、危機予防のデフォルトとして備えるべきことについて具体的に可視的な提案を発表し、紹介し、肯定的なフィードバックも得ている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、新型コロナウイルス感染に関する有事の時であるが、世界中の民が、「予防」の重要性について認識している。何か起きたときにどう対処するかは当然大切ではあるが、次の事態を予測して、備えておくことの意義は大きい。学校危機予防についても、目の前の教育や支援に目一杯であることから立ち止まって予防を考えることに時間を割くことに現場の抵抗感は大きい。本研究の危機予防の満足度調査から満足度は必ずしも高いものではなく、多くの問題点があることが明らかになった。授業にソーシャルエモショナルラーニングを導入することの有効性や、危機状況を可視化するキットの提案など、意義ある具体策を打ち出すことができたと考える。

研究成果の概要(英文)：School crises may involve not only bullying, truancy and delinquency, but also natural disasters and accidents. Although the processes of preparedness, intervention and recovery have been a focus of research and practice, the authors argue that prevention is a crucial strategy to tackle various types of school crises and multi-hazard situations. Furthermore, lesson plans for Social Emotional Learning, crisis prevention assessment, and development of crisis prevention kits with related workshop protocols, are proposed through symposia in academic conferences, research papers and books. The contents include practical, substantial and visible proposals to inform readers about what the default components are and how important they are in crisis prevention, and which works have been received with positive responses.

研究分野：発達心理学 学校心理学

キーワード：学校危機予防 ソーシャルスキルトレーニング 感情リテラシー 発達 居場所アイデンティティ ソーシャルエモショナルラーニング

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまでの研究レビューから、わが国の現実問題として指摘できる課題は大きく四つあると考えた。第一に、いじめ・自然災害・事故・不審者侵入等、各危機別の対応策が具体的でなく、マルチハザードに対応できる策を講じていない、特に危機時の組織と連携について明確でないこと、第二に、トラウマ予防となる、子どもの傷つきやすさ(vulnerability)への対応(レジリエンスや感情リテラシーの育成)が視野に含まれていないこと、第三に大規模なシミュレーション対策は火災対応のみに留まっていること、第四に、環境デザインと人との力動が安全面・安心面という心理変数に及ぼす影響について十分に配慮されていないこと、である。海外の包括的な危機予防対応策はアメリカの PREPaRE やオランダに本部を置く ESPCT がある。実際にトレーニングに参加してきたが、「学校」文化や職務体制の違いから、日本の実情にある学校危機予防対策を独自に考えることが必要という結論に至っている。

2. 研究の目的

学校危機予防には切り口がいくつも考えられたが、本研究では、危機予防のためのデフォルトになる複数の切り口を支援方法のフレームとして構造的にあえて捉えようとした。

まずは、学校のアセスメントの元に、対応できるような支援のシステムを想定することを目的とした。教員の危機予防に関する満足度やどういった対策に不満があるかを簡単な調査でアセスメントできる方法を考えることとした。

次に、学校環境に焦点を当て、学校の雰囲気に着目した。教員から、仲間からの死角が構内にあるかどうかや、不審者が来たときの動線、掲示板や空き教室の活用など、学校の「雰囲気」を心理的に規定する要因を抜き出し、環境の改善を行なうことを目的の一つとした。

3つ目に、子ども達の安心感や満足度のベースラインをとり、社会性や感情力の向上を目指すことによる、学習成果ややる気を生み出すことでエビデンスが明らかにしている、ソーシャルエモーショナルラーニングの考え方を基盤に、授業や活動にソーシャルスキルトレーニングなどを積極的に活用し、子どもたちのリソースとなる危機予防コンピテンスを高めるプログラムを開発することを目的とした。

4つ目に、実際に危機が生じた時に、ある程度の対応が可能であるという自己効力感を学校スタッフが持つことが、危機予防には不可欠であるという考え方が重視されていたことから、学校危機想定シミュレーションの実施などを試みることとした。

3. 研究の方法

ここでは、どのような対応や支援を行うかのベースとなるアセスメントの方法を確立しようとした。学校危機予防について効果的な支援を実現するためには、教師の危機予防についての不満や課題、さらにどのような方向の活動が重要かに関するメタ認知を促す支援のあり方が必要であると考えた。

そこで、学校危機予防のニーズ調査や支援の方向性を促すための尺度を活用し、具体的な学校危機予防につなげていく可能性を探ることとした。Varnava の Checkpoints for Schools をもとに作成した支援ツールを用いて 学校関係者に調査を実施し 所要時間・回答項目の分かりやすさなど 簡便性の点と 小学校・中学校・高等学校の各校種における妥当性などの 内容 についてヒアリングし、その上で校務分掌や学校種別の危機意識の特徴を明らかにすることとした。

対象

対象者：小学校・中学校・高等学校のいずれかで、全て常勤で教育の専門家として活動する学校関係者（指導主事など教育行政機関の所属者も含む）であった。

任意での回答に応じられた総数は 2088 件、そのうち有効回答は 1864 件であった。

実施時期・場所：2014～2017 年に、関東圏・本州・九州で行われたメンタルヘルス・教育相談・生徒指導・養護教諭等に関する複数の研修会への参加者を対象とした。

倫理的配慮：調査にあたり、調査への協力は任意であること、個人を特定される情報が取り上げられることはないこと等を説明し実施した。大学の倫理審査委員会に申請し 調査の承認を得た。

測度：学校危機予防支援ツール：

先行実践で用いられた Checkpoints for Schools を日本語に訳し 翻訳の妥当性などについて複数の研究者間で確認したうえで「研修」項目に ソーシャル・スキル・トレーニング に関する事項を加え安心安全な場づくりに向けた学校危機予防支援ツールの活用ツール試作版を作成することとした

質問紙の構成

すべての項目に対し 4 件法 (1: まだ十分でない、2: やや十分でない、3: まあ充分である、4: かなり充分である) で回答を求めた。下位尺度については、家庭・学校・地域との連携 10 項目 (ex. 家庭と連携し 具体的家庭と連携し 具体的な学校の方針に援助が得られるよう説明している)、価値 10 項目 (ex. 相互に敬意を払う関係がつけられている)、組織 10 項目 (ex. 学校危機を予防するために日課などが精査されている)、環境 10 項目 (ex. 駐車場や学校校舎外にも気を配っている)、カリキュラム 10 項目 (ex. 子どもに暴力のタイプや暴力がどのような子どもに問題を

もたらずか教えている) トレーニング 11 項目(ex. 葛藤解決のためのテクニックやプログラムを理解している)であった。

4. 研究成果

校長をはじめ校内のまとめ役を担う立場として 1)学校管理職：校内の児童生徒支援の役割を担う立場として、2)教育相談・進路指導・生活指導：すべての安心安全な場づくりに向けた学校危機予防支援ツールの活用、適応状況の児童生徒に関わる立場として、3)学級担任・学年主任：特別な教育的ニーズに対応する立場として 4)特別支援教育コーディネーター等、およびそれ以外のスタッフとして、5)その他、の 5 職種に分類した。

これらを職務・分掌ごとに 4 件法で回答のポイント合計を比較したところ、学校種および職務・分掌ごとに 6 差異が見られることが示された。また 6 領域の比較から、各領域間で学校危機予防の実践に関する認識に差異が見られることが示された。校内の職務・分掌による学校危機予防に対する認識は、小学校ではほぼ同等の認識ととらえられていることに対し、中学校・高等学校では特に学校管理職において高く、教育相談や学級担任、特別支援教育などの担当者の認識では低い結果となった。学年ごとの学級数が多く、学年主任など中間層の職務が明確化される傾向が強い中学・高校において顕著であり、直接的に課題対応をしている可能性が高い学級担任・学年主任や、教育相談や特別支援教育など適応援助推進者の危機予防の充実への認識は低い傾向が示された。また、6 領域間の比較から、特に 価値・研修・連携 に対しては高い評価が示された一方で、危機予防への組織の認識は低く評価されていた。

このほか、学校危機シミュレーションの試作キットを作り、教育委員会での学校危機予防演習で活用できるかを検討し、一定の成果がある、すなわち、どのような視点が落ちているかなど、メタ認知を高めることに効果があることがディスカッションで共有された。

さらに、ソーシャルエモショナルラーニングの授業は、学級の雰囲気をも高めることが統計的にも明らかにされ、論文としてまとめている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 渡辺弥生	4. 巻 10
2. 論文標題 ソーシャルスキルトレーニングの”これまで”と”これから”	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本学校心理士会年報	6. 最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺弥生	4. 巻 10
2. 論文標題 ソーシャルスキルトレーニングの”これまで”と”これから”	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本学校心理士会年報	6. 最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林朋子・渡辺弥生	4. 巻 65
2. 論文標題 ソーシャルスキルトレーニングが中学生のレジリエンスに与える影響について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 295-304
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大川真知子・渡辺弥生	4. 巻 74
2. 論文標題 母親の育児知識と育児不安の関係	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 法政大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 81-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 9件）

1. 発表者名 青山郁子・渡辺弥生・野呂幾久子
2. 発表標題 主観的幸福感とレジリエンスの認知の年齢層による違い
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺弥生
2. 発表標題 感情研究から知る子どもの道徳的行動の発達
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺弥生
2. 発表標題 家族で感情と社会性は教育できるか？－親子コミュニケーションの重要性を探る
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺弥生
2. 発表標題 子どもの感情発達を支えるもの－文化・社会・保育の視点から－
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡辺弥生・原田恵理子
2. 発表標題 ソーシャルスキルトレーニング
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原田恵理子・渡辺弥生
2. 発表標題 ソーシャルスキルトレーニングを定着させるコンサルテーション
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡辺弥生
2. 発表標題 SELが育む非認知的能力－何を育どのように子どもたちの幸福に貢献するのか－
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡辺弥生
2. 発表標題 学校における「レジリエンス教育」の取り組み - 子どものレジリエンス力を引き出し高める教育実践の工夫 -
3. 学会等名 第40回国際学校心理学会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1 . 発表者名 Watanabe,Y.,Hamana,M.,Watanabe,N.,Iida,J and Mizoguchi,A
2 . 発表標題 How children perceive, learn,and understand emotion? Emotional development from early to middle childhood
3 . 学会等名 40th International School Psychologists Association (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Watanabe,Y.,Martinsone,B.,Ikeda.M.,and Manzo,C,
2 . 発表標題 Social and Emotional Learning in the world.
3 . 学会等名 40th International School Psychologists Association (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Harada,E. and Watanabe,Y.
2 . 発表標題 Social skills training for high school students-focusing on evaluation of training in schools
3 . 学会等名 40th International School Psychologists Association (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Watanabe,Y.
2 . 発表標題 Social and Emotional Learning for Elementary School Students
3 . 学会等名 The 12th Anniversary Conference of the Asia-Pacific Network for Moral Education (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1. 発表者名 Watanabe, Y.
2. 発表標題 Social and Emotional Learning as Moral Education
3. 学会等名 The 12th Anniversary Conference of the Asia-Pacific Network for Moral Education (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Watanabe, Y.
2. 発表標題 Relationship between emotional literacy development and empathy in childhood
3. 学会等名 The Asian Conference on Psychology & Behavioral Science (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大川真知子・渡辺弥生
2. 発表標題 発達に遅れのある幼児を育てる親へのソーシャルスキルトレーニングの実践
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第27回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋あい・渡辺弥生
2. 発表標題 保護者対応における困難事例への若手保育士の対処
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第27回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡辺 弥生
2. 発表標題 心理危機研究をどのように現場実践に生かすか 研究の場と臨床現場の往還
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田 恵里子・渡辺 弥生
2. 発表標題 高校生対象のスクール・学級・個別ワイドによるSSTの効果
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡辺 弥生
2. 発表標題 児童生徒のインターネット上でのいじめやトラブルをどう理解し、どう介入するか
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小林 朋子・中道 昌良・渡辺 弥生
2. 発表標題 学校危機を想定したシミュレーション研修に関する研究（3）－大規模災害を想定して－
3. 学会等名 日本学校心理学会第19回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小高佐友里・渡辺弥生
2. 発表標題 スクールカウンセラーの視点からの学校危機予防意識
3. 学会等名 日本学校心理学会第19回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Watanabe,N.,Hamana,M.,Watanabe,Y.& Iida,J.
2. 発表標題 Promoting child development and learning from infancy to adolescence: Mothers' and teachers' beliefs, attitudes, knowledge, behavior, and practice
3. 学会等名 International School Psychology Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tamika La Salle, Jesslynn Neves, Shane Jimerson, Chryse (Sissy) Hatzichristou, Orlean Brown Earle, & Watanabe,Y.
2. 発表標題 Cross-Cultural School ClimateValidation Study
3. 学会等名 International School Psychology Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 渡辺弥生	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 168
3. 書名 ソーシャルスキルトレーニングによるアプローチ	

1. 著者名 二宮克美・渡辺弥生	4. 発行年 2017年
2. 出版社 北大路出版	5. 総ページ数 187
3. 書名 『発達心理学』心理学と仕事シリーズ5巻	

1. 著者名 渡辺弥生・西山久子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 190
3. 書名 必携 生徒指導・教育相談－生徒理解、キャリア教育、そして学校危機予防まで	

1. 著者名 渡辺弥生	4. 発行年 2019年
2. 出版社 合同出版	5. 総ページ数 127
3. 書名 イラスト版子どもの感情力をアップする本：自己肯定感を高める気持ちマネジメント50	

1. 著者名 渡辺弥生・藤枝静暁・飯田順子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 133
3. 書名 小学生のためのソーシャルスキルトレーニング	

〔産業財産権〕

〔その他〕

法政大学 文学部 心理学科 渡辺弥生研究室
<https://sites.google.com/site/emywata/Home>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西山 久子 (Nishiyama Hisako) (80461250)	福岡教育大学・大学院教育学研究科・教授 (17101)	
研究分担者	小林 朋子 (Kobayashi Tomoko) (90337733)	静岡大学・教育学部・教授 (13801)	